アルツハイマー型認知症を一因として摂食障害を呈した一症例への食支援
～KTBC を用いたアセスメント～

医療法人春風会　田上記念病院　リハビリテーション部
〇樺山翔太　持増健作　立岩恵　久保かおり　坂口真理
田中精一　川上剛　亀澤康裕　中村浩一郎

【はじめに】
今回、アルツハイマー型認知症(以下 AD)により摂食障害を呈している患者に対して KT バランスチャート(以下 KTBC)を使用し、介入が有効であった症例を報告する。
【症例紹介】
A 氏、80 歳代女性。X 年 3 月にリハビリ目的で施設に入所。以前より食思低下があったが X 年 5 月から経口摂取がほぼ不可能になり、点滴補液開始。X 年 6 月に内服できずに腎機能低下、高度貧血で当院に入院となる。入院時は HDS-R:3 点、FIM:21 点、やる気スコア:29 点であった。
尚、本研究は当院倫理審査委員会の承認を得て実施した。
【方法】
入院9日目よりリハビリ開始。KTBC の結果、全身状態、嚥下機能等には問題を認めなかったが、AD による食べる意欲、認知機能の低下を大きな問題と捉え、先行期障害に着目したアプローチを行った。方法は、生活リズムの確立を目標に離床時間の確保、食堂での食事、食事開始の意識付けとして姿勢調整と口腔体操を実施した。また、食形態と量の調整、状況に応じた声かけ、食後の歯磨きを習慣化する等の環境調整を行った。さらに、症例の嗜好に合わせて味付けを薄く調整し、元々の習慣である TV を鑑賞しながらの食事や空腹感を持てるよう時間調整等の個別対応を行った。
【結果】
3 か月後の評価は、体重:34.4→36.1 kg、Alb:2.8→3.4g/dL、KTBC:31→52 点、FIM:21→36 点、HDS-R:3→17 点、やる気スコア:29→25 点に改善。
【考察】
本症例は、AD による先行期障害が著明であった。鷲尾らは食行動の障害のある認知症患者に対し、生活リズムの改善、口腔体操、食形態等の工夫をすることで食行動の障害が改善したと報告しており、本症例においても先行期障害が改善され、全身状態の改善に繋がった。今回、AD に対する KTBC の有用性が確認でき、多職種で包括的にアプローチしていくことの重要性を再認識した。